

數論派とヴェーダーンタ派の交渉の一斷面

磯田 熙文

ヴェーダーンタ派は、シユヴェーターシユヴァタラ、カタ、プリハツドアーラヌヤカ等のウパニシャドにおける、いわゆる數論的要素とみなされる所説に對して、意識的に數論派とは異つた理解を與えて、ウパニシャドが數論の權證たることを極力否定しようとする。こゝに、ヴェーダーンタ派の形成・展開の歴史的契機の一つがあつた。このことは、すでに宇井博士の指摘以來、學界の承認をえていることであるが、このような歴史的事情からみて、ヴェーダーンタ派の基本的論典であるブラフマースートラにおいて、數論破が大きな比重を占めているとしても不思議はない。

そこで、こゝでは、この數論破の消息の一端を伺いたい。このことは、ヴェーダーンタ派の成立事情等を究明する手掛りとなり、インド哲學史上の興味ある課題たるを失わない。

ところで、まずこの場合、シャンカラの註釋を依用する。これは、ヴェーダーンタ派の歴史的事情からいつて當然の手續きである。そして、當然の課題としては、第二編第二章一一〇に問題を限定する。

この部分は、上述のウパニシャドの權證論問題を離れて、内容の上から論法的な手續きによつて數論を論破しようとしている部分で

ある。
こゝで、その論旨を、三項目に要約して述べることを便利である。

(一)數論派は、周知のように、純粹に精神的な靈我（じんぎ）と精神（しんじん）を持たない（＝無知の）勝因（しょういん）とを立てる二元論の立場をとる。

そこで又、數論派では、勝因は、世界の根本原因として、靈我からは何ら積極的な關與を受けることなく（cf. SK 19）、牛乳が凝乳になるように（cf. SK 15 諸注釋）、まさにひとりで svadhāvenai 展開する、即ち轉變する、と主張する。

これに對して、ヴェーダーンタ派は、世界の展開は、精神性に基づく方向性、企畫性、あるいは意志を持つことなしに、即ち動力因として精神的な始動者を豫想することなしにはありえない。例えば、世間においても、家・宮殿・寢臺等は智慧を持つ職工達によつて作られることがみられると反論する。

このような立場から、數論の非精神的な勝因が世界原因としてひとりでに轉變するということは不合理である、と論難する（二・二一、二二、三、五）。

又、數論派で、勝因は、その構成要素たるサツトバ、ラジャス、タマスの三徳が均衡状態にある（cf. SK 16 諸注釋）、その均衡が破れて、大等に轉變する。その場合に、三徳は動くことを働きとして持つているから（cf. SK 13 諸注釋）、不均衡になろうとすることがまさに論理的に相應する、と主張する。

これに對して、ヴェーダーンタ派は、知識能力のない三徳（＝勝因）が世界形成をなすことが不可能なことは前述の如くである。又、靈我は、勝因の活動に無關心（＝中直、cf. SK 20）であると

(數論派で)認める限り、その三徳の均衡を破る動力因とはなりえない。

結局、いずれにしても、數論説では世界展開の原因を説明できない、と論破する(二・二・四、八、九)。

(二)數論派では、勝因と靈我との關係について、勝因の轉變は靈我のため、即ち靈我が受用するためにあり、その受用によつて解脱がある、という目的論的な解釋をする。その場合、盲者と跛者(=SK 21)の磁石と鐵(=cf. M. V. p. 14)等の比喩をもつて、兩者の關係を説明する。

これに對して、ヴェーダーンタ派は、勝因の轉變に目的を求めることは、數論の教理による限り、論理的な過失に陥るに違いないとして、五つに目的を分けて、一々を論破する。

(a)靈我が受用するためであるとすると、樂を得、苦を捨て、というような餘分のものが何ら與えられない靈我にはいかなる受用もないから、又、受用のみでは解脱がないことになるから、それを目的であるとすることは不合理である。

(b)靈我が解脱するためであるとすると、轉變以前に解脱が成就しているから(=cf. SK 19・62)、轉變が無意味のものとなる。又、解脱のみでは、聲等の對象の知覺(=cf. SK 42・56・58・66 諸注釋)もないことになる。

(c)受用と解脱の兩方であるとすると、勝因の構成要素は無限である、従つて、無限のものゝ受用は不可能であるから不合理である。

(d)欲望を鎮めること(=cf. SK 58・59)でもない、なぜなら、精神を持たない勝因に欲望はなく、無垢で、思惟能力のない靈我にも欲望は生じないからである。

(e)靈我の見る力(=cf. SK 19)と勝因の創造力(=cf. SK 11・15等)が無意味にならぬように、活動があると(數論派で)主張しても、兩者の力が固有、不斷であることになるから、解脱は不可能である、と(二・二・六)。

又、例えば、靈我は何ら活動にあずからないのに、靈我に比せられる跛者は實際には言葉等の働きにより盲者を動かす等の説明によつて、數論派で引用する比喩は、比喩として不適當であることを指摘する。

結局、精神的な靈我と非精神的な勝因との關係を合理的に説明しえない數論の二元論の主張は不合理である、と論破する(二・二・七)。

(三)數論では、苦しめられるもの *tapya* と苦しめるもの *tapaka* という關係において、その兩者の結合の因(不可見力 *adarśana*)を斷することによつて解脱をうる、という能所の二者的立場から解脱論を説く。

これに對して、ヴェーダーンタ派は、たとえ、タプヤ、ターパカの關係を認めたとしても、三徳の發生と伏すること、又、結合の動力因の停止も共に不確定である以上、即ち數論の教理に基づく限り、そのような能所の解脱論は論理的な過失に陥る。

従つて、數論の解脱論では、勝義にも世俗にも、解脱を得ることが不可能である、と論難する(二・二・一〇)。

要約すれば、根本的には、以上の三點から數論を論破し、もつて、ヴェーダーンタ派は一元としての梵を最高原理として主張しようとしていることを知る。

この論文發表に際して、羽田野伯猷先生の御指導をいただいた。

數論派とヴェーダーンタ派の交渉の一断面（磯 田）

1 宇井博士、「吠檀多經の源流について」哲學雜誌、第三七六・

三七七號（「印度哲學研究」第一、百三頁以下）。なお、宇井博士「Sāṃkhya-yoga についで」哲學雜誌、第三七八・三八〇號等參照。

2 數論教理學上では、勝因と靈我との關係は、靈我解脫論との關係において、覺と靈我との關係において捉えて、プラティビンパ說等によつて、種々の比喩をもつて、合理的に解釋しようとしたことが知られている。羽田野伯猷先生、「數論のプラティビンパ（反影）說について」文化、第十卷、及び「數論派における解脫論と數論偈」印佛研、第一卷、第一號、百七十頁參照。

3 このような能所の二者的な解脫論は、自性解脫論の立場をとる數論偈の中には明確に見出すことはできない。羽田野伯猷先生「前掲論文」印佛研、第一卷第一號、百六十七頁以下、參照。

4 この一一〇に援引される數論説は、文中（ ）内に示したように、自在黒の「數論偈」及びその諸注釋書に、多く對應する部分が見出される。

新刊紹介（三）

一四六

靜谷正雄「インド佛教碑銘目錄」

——グプタ時代以前の佛教碑銘——

一 グプタ時代以前の佛教碑銘 その一

（ブラーフミー文字）

二 グプタ時代以前の佛教碑銘 その二

（カローシティ文字）

附錄 一部派名索引

二 寺塔諸堂名索引

三 僧尼・信者の稱呼索引

四 職業（ギルドを含む）・身分・種族關係索引

五 支配者氏名・稱呼索引

B5判 本文二五三頁 索引六頁
東林書房刊 定價 一、〇〇〇圓